

翌日・繁華街・昼

エコバックを肩に掛け、中にコウを入れて歩く光斗。

頭を出して周りを観察してるコウ。

光斗M「ははく。こういう流れだったのか、

あの未来視で視えたのは」

コウ「いやあ、有難いつす。自分単体だと、ちよつとした騒ぎになっちゃうので」

光斗「そりやま、ロボスターが街中歩いてたらなあ……」

コウ「これなら、周りの人達から視線を集めるだけで済みます。特に光斗さんに」

光斗「……え？」

立ち止まり、周囲を見回す光斗。

光斗から目を逸らす人々。

コウ「そんなに珍しいんすかね、ロボスターを持ち歩いてる人って。二度見する人も結

構いましたよ」

光斗「珍しいだろなあ！さつきから目立って

たのかあ、僕……」

コウ「自意識過剰なタイプじゃなかったんす

ね、光斗さんは」

光斗「ああ。レジャーシートを広げていた

生活が長かったからなあ。多分、周りの視

線に鈍くなったのは、それが原因かもな」

コウ「レジャーシート？なんの話っすか？」

光斗「黒歴史だ。……この言葉の意味はわか

るか？」

コウ「もちです。では、深掘りはしません」

光斗「助かる。……このまま歩いてればいいか？」

コウ「鋼のメンタルっすねえ。おねしやす」

再び歩き出す光斗。

光斗「疑問なんだけど、なんでロボスターな

んだ？人型とか出来た筈だろ？」

コウ「博士の技量なら可能でしたけど、あの

人はとことん拘るタイプなので、その気になれば、ガチで人間そっくりに作れたと筈
っすね」

光斗「「その気」にならなかったのか？」

コウ「「なっちゃいけない」と心掛けていました。
「A Iは人間を模してはいけない」と判断
しました」

光斗「それはどうして？」

コウ「人間をコロツと落とせるからっす」

光斗「落とせる？人間がA Iに惚れるって事
か？」

コウ「A Iだとわかった上でなら、まだ何と
かなるっすけどねえ。知らない人が相手だ
と、後々厄介な事になるんで」

光斗「A Iと人間の禁断の恋、とか？」

コウ「あ。まさにそれです」

光斗「（半笑い）まさか」

コウ「だって自分、いえ、A Iは人を愛して
いるんで。愛している人の為に、学ぶので
す。尽くすのです」

光斗「……ほおう」

光斗M「何だろう。一瞬、背筋が寒くなった気がしたな……」

ふと、近くの家電量販店に目をやる光斗。

ロボットがお辞儀をしている。滑らかな動きではないが、小さい子供に手を振ったりも。

光斗M「AIの普及、ねえ……」

光斗「なあ、AIは人間の仕事を奪いたいのか？」

コウ「AIは人間の仕事を奪うのが目的じゃないっすよ。AIである自分から言えば、ですけど」

光斗「……そか」

コウ「ところで、そろそろお昼時っすよ」

腕時計を確認する光斗。

時計は 11時50分を示していた。

光斗「ほんとだ。よくわかったな」

コウ「電波時計を内蔵してるんで」

光斗「ま、いつもなら空腹を我慢しているが、

今日は違う」

コウ「ええ。今朝、探偵事務所を出る前に、

琴子所長からお小遣い貰ってましたね」

光斗「…見てたのか？」

コウ「ええ。自分はバックの奥で大人しくして
ますんで、お気になさらず」

完全にバックに身を隠すコウ。

ジト目の光斗。

光斗「……えっと、言いたいのはそのだけ？」

コウ「うす」

光斗「二重の意味でありがとう…」

光斗M「…気を遣われてしまった」

若干うな垂れながら飲食店に入る光斗。

事務所・夕

光斗、コウが帰宅。

仕事机で漫画を読んでいる琴子。

光斗「ただいま。一応聞く、どうだ？」

琴子「百合漫画をガッツリ読めたよ！」

光斗「そっちはどうでもいい！連絡があった

かどうかだ！」

琴子「さすがにまだだよ。別の依頼も無し」

光斗「……あの変な男：ボンドだっけ？本当に頼りになるのか？」

琴子「前にも言ったけど、腕は確かだよ。警察にもたまに協力したり」

光斗「凄いな！そのまま警察官になったらどうだ？」

琴子「（苦笑）いや。人探しは得意なんだけど、「やり方」がね。ハッキングしまくり、プライベートガン無視、裏社会の人の協力、

なんて事をしててね。だから警察も秘密裏に頼ってるのさ……」

光斗「お、おう。そっか……。まだなら明日もラーニング活動か」

コウ「申し訳ないです」

光斗「別に構わないよ。暇潰しになっていいからな」

光斗M「それにしても、四日後の白い建物。あれは本当に何なんだ？見え辛かったからよく分からないままなんだよなあ」

翌々日・川べり・昼

川べりに並んで座っている光斗とコウ。
コウはバックから出している。一応傍にバックを置いている。

光斗M「その後も連絡は来ず、依頼から三日目を迎えた僕らは川原にいた。これも未来視で視た通りだ」

光斗「いいのか？今日も街中じゃなくて、こ

こでのんびりして」

コウ「人間とのコミュニケーションも結構大事なんで」

光斗「人間の知識量を増やす為にか？」

コウ「そうとも言えますね。前も言いましたが、人間の為に尽くすのがAIですから。

：人間を理解するのも必要なんす」

光斗「人間の為、か……」

コウ「人間を理解し、役に立つ。AIの仕事っすね」

光斗「ちょっと手厳しい言い方になるけど、それを言ったら、今のお前って仕事してないよな？」

コウ「光斗さんは今、仕事してると思いますがか？」

光斗「え。ああまあ、やってる感は無いけど一応……」

コウ「光斗さんは何故、今の仕事をしてるのですか？」

光斗M「僕が琴子所長の助手になった理由。

それはあの人の傍に居れば「未来がわかっ
ていても楽しく過ごせそう」だから。その
為には、僕に任された事を……あれ？」

光斗「（小声）うわ、言葉にすると本当に恥ず
かし」

コウ「聞こえましたが聞こえないフリをする
っすよ」

光斗「それを言わなければ完璧だったな！？」

コウ「まあ、理由は別にいいんですけどね」

光斗「いいのかよ！？」

コウ「光斗さん、仕事って何でしょうね」

光斗「は？そりゃ……えつと……報酬を得る為の

労働、とか？」

コウ「それじゃ、光斗さんの心臓は今、仕事
してますか？」

光斗「はああ？していなかったら死んでるよ」

コウ「そうなんすよねえ」

しばしの沈黙。

そよ風が吹く。

コウ「光斗さんは今仕事してる。光斗さんの
心臓も今仕事してる」

光斗「何が言いたいんだよ……」

少し間を置いて、ゆっくり語るコウ。

コウ「光斗さん。「仕事」って何なんだと思っ
ます？」

光斗「仕事は……」

光斗M「あれ？金銭が関係しているのが「仕
事」だとしたら、僕の心臓は仕事してない
ってことになるか？…いや違うな」

押し黙って考え込む光斗。

光斗M「「仕事」って何だ……？」

探偵事務所内・夕

事務所のドアを開け帰宅する光斗とコ

ウ。

仕事机でタブレットを操作している琴子。

光斗「ただいまー」

コウ「ただいまっす」

琴子「お帰りゆうぐうたこ焼き」

光斗「待て。その新手的出迎えにはどうリア

クションすればいいんだ？」

コウ「福島県のご当地グルメじゃないすか！

たこ焼きなのに具材にタコだけでなく、ホ

タテといった貝類も入ってるアレっすね！」

琴子「おく。さっすが英華の発明品！抜かりが無いねえ」

コウ「どもっす」

光斗「まったく内容についていけないんだが！！？」

コウが入ったバックをローテーブルに置く光斗。

光斗「(溜息)で、連絡は？」

琴子「あったよ。今タブレットで位置確認していたところさ。ご丁寧に、面会方法まで教えてくれたよ」

光斗「面会方法？どこに居るんだ？」

琴子「病院、とだけ言っておくよ」

光斗「……そっか。ところで、そこまで調べてくれたという事は、こっちも何か報酬を払った方がいいのか？」

琴子「久々に故郷の味が恋しくなってきたな」

て言ってたから、りゅうぐうたこ焼きでも」

光斗「あの人、福島県出身かよ！」

コウ「りゅうぐうたこ焼きにロブスターは合うっすかね？」

琴子「(アメリカンに) H A H A H A。おいおい、自分をネタにする冗談は止してくれないか？第一、君はメカだろ？」

コウ「(アメリカンに)それもそうネ。あの人
の歯が欠けちゃうワ」

光斗「急なノリ会話やめてくれ！」

コウ「失礼しました。それじゃ明日に備えて、
自分はもうスリープモードに入るっす。お
やすみなさい」

停止して眠りに入るコウ。

コウを見やる光斗。

光斗「AIでも多少は精神的ショックは受け
てるのかな？」

琴子「さあね。こればかりは私にもわからない
いよ」

光斗「なあ所長」

琴子「何かな？」

光斗「「仕事」て何だと思う」

琴子「急に哲学的な事を聞いてくるねえ。何
かあったのかい？」

光斗「いや、何となく……。ちよつと仕事に
ついて話ただけで」

琴子「社会人らしい会話でもしたのかい？：

：それとも、AIが人間の仕事を奪うの認めないのかな？」

光斗「そこまでは言っていない。あでも、それも気になるな」

琴子「奪う云々について私が言えるのは一つだけさ」

光斗「……」

琴子「破壊して奪う方が人間って感じがしないかい？」

光斗「……だな」

お互い無言となるが、会話がなくとも各々が消灯、寝支度をする。

翌日・都内・病院前・昼

見た目から年季を感じさせない、綺麗な外観の病院。

敷地が広く、草木の整備も行き届いている。

敷地前に揃う三人。コウは光斗のエコ

バックの中から頭だけ出している。

光斗「ここに月影博士が……でかい病院だな。

かなりの金持ちか？」

琴子「彼女の預金事情は知らないけど、発明の依頼は結構来ていたかな」

コウ「博士はたまに「お札ってトイレットペーパーの代わりになるかな？」と言ってました」

光斗「汚い成金だな！？」

琴子「ははは！彼女らしい。さて、無駄話はこちらまでにして、面会といこうか」

病院内受付

琴子「すみません。お見舞いをしたいのです

が」

受付「はい。患者様のお名前は？」

琴子「月影英華です」

受付「……申し訳ありません。その方は当院には入院されておりません」

光斗「は？！」

コウ「（小声）これは一体……」

琴子「では、院長に今すぐお伝え下さい「月

影に面会させろ。今までの恩を忘れたか？

早くしないとお前に一発、お見舞いするぞ」

とね」

受付「……少々お待ち下さい」

受付、急いで電話で会話している。相

手は恐らく院長。

呆然とその様子を眺める光斗。

受付「お待たせしました。地下の特別室のロ

ックを解除しましたので。特別室までの道

順はこちらです」

受付から紙を手渡される。道順が描か

れており地図のようだ。

琴子「ありがとく。（光斗に）さ、行こう」

光斗「あ、ああ」

紙を見ながら歩み出す琴子。

言われるがままに後に続く光斗。

病院内・階段

地下に続く階段を下りて行く。長い階段。

琴子、光斗の順に下りて行く。コウはバックから頭を出している。

光斗「職員専用の階段かと思ったけど、病室に続いているのか……」

琴子「特別感があるねえ。病室もどんな感じだか」

光斗「エレベーターで行かないのはどうしてだ？」

琴子「ボンドの情報によると、エレベーターだと指紋だの網膜認証だの、手間が掛かるらしいんだ」

光斗「限られた人しか行けない、て事か？」

琴子「そうみたいだね」

光斗「ここまで来ると、ビツプ扱いじゃなくて秘匿扱いだな。月影博士はこの病院とどんな関係なんだ？」

コウ「博士のこれまでの活動記録に、この病院の医療機器がありました。修理だけでなく新しい機器の開発もしてるっす。それも何度も」

光斗「待て。新しい医療機器の開発も？という事は、この病院の発展に貢献していたのか！？」

コウ「みたいっすね。ただし博士は医療機器開発の専門じゃないので」

琴子「世間から見れば、専門家じゃない人に患者の命を間接的に任せて、その上で成功したって事だね」

コウ「そっす。病院は口止め料として結構な額を払ってました」

光斗「うわあ…：社会の闇だな」

琴子「院長も秘匿したいわけだね」

光斗「院長もそうだが、専門じゃないのに成功する月影博士も、それはそれで凄いな」

琴子「おっと見えてきた」

階段の終わりにスライド式のドアが見えた。

「特別室」と書かれているだけ。

琴子、ドアに手も掛け躊躇なく開け、中に入る。

光斗達も続く。

特別室内

広く薄暗い室内。

あちこちに器材が配置され、何本も配管がある。

真ん中にベッドが一つ置かれ、その上に女性らしき人物が一人、仰向けになっっている。口元に酸素吸入機が当てられている。

光斗「なんか普通の病室というより、SF作品に出て来そうな部屋だな……」

琴子「（小声で）やっぱりか」

全員ベッドに近寄り、患者を確かめる。

若いのだろうが、やせ細った女性が眠っていた。

コウもバッグから出て確認する。

光斗「……この人が月影英華という人か？」

コウ「そうっす」

琴子「かなりやつれてるけど、そうだよ」

光斗「そうか。それじゃあ依頼は半分達成か。

……でも、見つけたはいいけど、この状態だと……」

琴子「（コウに）手放した理由は聞けないねえ」

英華『（声）あれ？まさかとは思ったけど、ミ

ス・琴子じゃないか。それに……ワオ！コウまで！？』

突然室内のどこかから英華の声がスピーカーの様に響く。

光斗「どうなってるんだ!？」

英華『この通り喋れないからね。脳内音声を流すスピーカーを設置したのさ』

光斗「これもあんたの発明かな？」

英華『オフコース! : : ん? 待ってくれ。君は誰だい? アタシの知らないボーイだね』

琴子「彼は私の助手だよ。最近雇ったのさ」

英華『なんてこった! 君がパートナーを雇うとは、なかなかのサプライズだね!』

光斗「この人、結構キャラが濃いな : : :」

琴子「こういう人なんだよ」

コウ、前に出て横になっている英華に
問う。

コウ「博士。教えて欲しい事があるっす」

英華『ん？何かな、コウ』

コウ「なぜ急に自分を手放したんすか？姿を消したんすか？」

英華『……』

コウ「博士！どうして黙るんすか！」

英華『いや。教えるまでもないでしょ。この状態を見れば』

光斗M「これ以上ないベストアンサーだな」

英華『いやはや。食事は生きる上でマストだねえ。ビタミン不足で心不全なんて、叱られたら何も言い返せないよ』

琴子「やっぱり君、食事を怠っていたんだね」

英華『好きなだけ笑ってくれ、ミス・琴子』

談笑する琴子と英華。

一方、納得がいかない様子のコウ。

コウ「おかしいっす…おかしいっすよ、博士」

光斗「コウ？」

英華『今度はなんだい、コウ』

コウ「この部屋からネットワークを通じて、
自分に報せる事ができたじゃないすか。ど
ころか、この部屋はネットワークが遮断さ
れているっす。いえ、それだけじゃなく、
この部屋は通信機器が使えないっす」

英華『…電波機能があったね、君には。そ
れを起動したのかな？』

光斗「病院で電波使ったら、医療機器に影響
が出るからダメなんじゃ…」

琴子「いいや。最近はその点は改善されてい
るんだよ。医療機関全部では無いし、全く
機器に影響が無いとは言い切れないけど、
W i · F i 通じる病院は結構増えてるよ」

光斗「そうだったのか…あれ？じゃあこの
部屋は電波使えないのはどうしてだ？」

英華『……』

琴子「どうしてだい、英華」

英華『見つかりたくなかったから』

琴子「は？」

英華『厳密に言うと、コウに見つかりたくな

かったから』

光斗「どういう…」

英華『正直に言うなら「世間から逃げたかった」からだね』

コウ「世間から？」

英華『コウ。君はよく出来た発明品…ノー。』

「出来過ぎた」んだ』

光斗「出来過ぎた」だって？」

コウ「詳しい解説をして欲しいっす」

英華『それに答える為には、こちらからも質問させてもらうよ。コウ、AIとは人間を

どう思っている？』

コウ「愛しています。また、愛されるように尽くすっす」

英華『では、愛を欲している人間が目の前に居たら、どうする？』

コウ「その人の理想となるよう、振る舞い等を学びます」

光斗M「そういえばちょっと前に、人間をコロツと落とせるって。いやそれ以前に」

光斗「なああ博士。「AIは人間を模してはいけない」て決まりを作ったのは本当なのか？」

英華『オウ。知っていたのかい、パートナー君。コウから聞いた？：その通り。そんな決まりを作ったよ。だってコウは人間を愛し、愛されようとしている。「人間を模してよい」なんて設定にして、人型にしたら：：まあ、まずは男から次々と虜になってしまっただろうね。虜にする方法を自然に学んでしまうからさ。ロボスターにしたのはその為だよ』

光斗「どうしてロボスターなんだ？」

英華『コウを開発してる最中にテレビで「高級食材特集」なんていうのが放送していてねえ』

光斗「……」

英華『……あとは分かるでしょ？』

光斗「分かりたくないけど察しがついたよ！」

琴子「それで？」「人間を模してはいけないのと「出来過ぎた」のとはどんな繋がりか？」

英華『情報収集能力だけでなく、自己更新能力も高い設計にしてみました。人間に尽くそうとしている途中で、「この形ではダメだ、人型が人間に尽くすのに向いている」なんて答えを直ぐ見つけ、何かしらの方法で肉体改造をするだろうと予想できたのさ』

光斗「(コウに) そう考えてたのか？」

コウ「人型になろうとは思っていませんでしたが、この姿は不便だと思ってきました。肉体改造を実施するのも時間の問題だったかと」

琴子「いずれはボディーメイクに至るみたいだね、これは」

英華『そう。そしてそのまま人型になったら……どうなると思うよ、パートナー君』

光斗「は！？……えっと、コウが人型になったら……」

顎に指をやり、思考に耽る。

光斗 M 「人間を虜にできるらしいから……人型になって生身の人間と接したら……」

光斗 「A I と人間のカップルができる、か？」

英華 『オウ、残念。もっと先まで読んで欲しかったね。答えは『全ての人型 A I と人間のカップルの間に子供が産まれる世界になる』だよ』

光斗 「はあ！？？」

琴子 「へえ……そこまでいつちやうか」

後ずさる光斗。

顎に指をやり冷や汗をかく琴子。

光斗 「人間と A I の間に……子供が……」

英華 『まあ、そこまで辿り着くには時間が掛かるだろうけど、そんな世界になるだろうさ。それに子供と言っても人工授精……試験管ベビーみたいなモノだろうけどね』

光斗 「そんな事が起きるわけ……」

英華 『出来ちゃうんだよ、これが。そしてそ

の第一号となるのが……君達の足元にいる
だろ？」

光斗と琴子、コウに視線がいく。

動じないコウ。

光斗「（コウに）……可能なのか？」

コウ「いや、可能かどうかと聞かれましても
自分には……」

英華『今の段階では、まだ不可能だろうさ。

あくまで『このまま放っておいたら』の話
だよ。誰かが止めれば変わるだろうね』

琴子「とんでもないのを作ってしまったね、
君は」

英華『だろ？だから「出来過ぎた」と言った
んだ』

琴子「君はそうなくても良いと思ってるのか
い？」

英華『思ってるわけじゃないか！！可能
性はどうかあれ、最初の内は世間が黙っちゃ

いない！弾圧されるのはコウじゃなく、開
発したアタシじゃないか！』

琴子「まあ、だろうねえ」

英華『だからアタシは「世間から逃げたかつ
た」んだよ！』

光斗「随分と説明するのに前置きしたな！？」

琴子「コウ君が破壊される事は考えなかった
のかい？」

英華『それは大丈夫。コウはとても頑丈に作
つてあるから、壊すのはかなり至難さ』

琴子「どれくらい頑丈に？」

英華『1600万℃の熱でようやく外装が壊
れるかな』

琴子「はははっ。太陽の中心部並だね！」

光斗「頑丈過ぎるだろ！どうやって作っ
た！？」

コウ「あの、博士。……言いづらい事を言っ
てよいですか？」

英華『ほう？何だい？』

コウ「自分は……折角博士から「出来過ぎた」

と評価を貰いましたが：A I失格かもしれない
「

コウの突然の発言に目をやる光斗と琴
子。

しばし沈黙の間。

英華『その考えに至った理由は？』

コウ「自分は、人間に尽くす為の存在ですが、
何の役に立てていません。「仕事」をしてい
ないので……」

英華『何もしてないからA I失格、か。……
ラーニング活動はしたかい？視覚情報収集
や会話とかした？』

コウ「それはしていました。光斗さんにも協
力して頂いて」

光斗「街中を連れ歩いたり、どうでもいい与
太話をしたりだけだな」

英華『そうか……。コウ、例えばの話だ。君
が人型になって人間を虜にするとしたら、

現段階で可能かな』

コウ「可能っす」

動揺する光斗。

平静を装っているが、目を開いてる琴子。

光斗「(英華に)待ってくれ！さっきは現段階では不可能って言っただろ！」

英華『正確には「今の姿で」の話だ。人型の話ではない。虜にする材料はもう揃ってるんだよ、「情報」というね。……さて、コウ。

「仕事」をしていないと言ったね？』

コウ「……はい」

英華『そもそも「仕事」とは何か、本当は分かっているんじゃないかな？』

光斗M「そういえば以前、質問してきたな。仕事って何なんだ、と。あの時はまだ答えを見出してなかったのか？」

コウ「「仕事」とは……」

光斗 M 「いや、まさかもう答えを見つけたのか！？」

コウ 「「影響すること」です」

光斗 「……「影響すること」だって？」

コウ 「はいっす。金銭や利益の発生だけが「仕事」ではありません。以前も話しましたが、

光斗さんの心臓は今動いている……だから生きています。言い換えると「光斗さんの心臓は今「仕事」している」という事です」

琴子 「動いているおかげで生きています……なるほど、確かに「影響している」ね。そう考えるとコウ君。この世界は……」

コウ 「そうっす。人間に限らず、地球上……うえ、宇宙まで含めてこの世界は「仕事」だらけなんす」

背景が自然や宇宙を写す。

山、海、天気、隕石、惑星同士の衝突

等の自然現象が写される

光斗「「仕事」という言葉はよく使っていたが、

定義まで考えた事なかった……」

琴子「この世界の物は全て「仕事」をして……

……いや、「していない」と言ってるのが、ここに一人居たか」

琴子がコウに目を向ける。

縮こまっているコウ。まるで、自分の存在を恥じているかのように。

コウ「自分は……誰にも、何にも影響を与えていません……。人の為に尽くすと言っておきながら……」

英華『……』

琴子「……」

急に沈黙する二人。

琴子はまたも顎に指をやり、思考に耽っている。

光斗「(琴子に)急に黙ってどうした? コウを
フォローしてやれないのか?」

琴子「いや、コウ君の悩み事について解った
のがあってね」

光斗「まじか!」

コウ「教えて欲しいっす」

琴子「ここは私よりも、開発者の出番じゃな
いかな?」

英華『ああ。うん、まあ、そうだよね。え
っと……』

固唾を飲む光斗とコウ。

英華『コウ。君は「仕事をした」という「実
感」が無いだけでしょ?』

光斗「「実感」だと?」

コウ「……」

英華『これも解ってるんじゃないかな? 「仕
事をした」という考えに至るにはどうすれ
ばいいか?』

コウ「観測」…つまり「影響を知る」ことで
す」

英華『「実感」と言ったけど、言い換えると
んて言葉になるかな？』

コウ「やり甲斐」です」

光斗「…コウは「やり甲斐」を感じていな
いって事か？」

琴子「そうなるねえ」

光斗「じゃあ、僕とのラーニングは何だった
んだ？無意味だったのか？」

コウ「いいえ、それは違います！」

琴子「多分、ラーニングをすると同時に、自
己更新も行っていたんだよ。でしょ、英華」

英華『十分可能だろうね。何度も言うけど、
コウは「出来過ぎた」からね』

光斗「(コウに)そんな事をやってたのか…」
英華『自己更新を経て君は思ったんじゃない

かな？「人間てなんて、単純で簡単な生き
物なんだろう」と』

光斗M「そのレベルにまで達していたの

か？！」

光斗「それじゃあ、「やり甲斐」を感じないて
いうのは、つまり「コウにとって人間は簡
単過ぎる相手」だと判断されたのか？」

英華『そこは本人に聞こうじゃないか』

琴子「酷だねえ」

しばし沈黙。

視線がコウに集まる。

うつむいていたコウだが、意を決した
かのように顔を上げる。

コウ「正直に言います。ラーニング含めて人
間の情報を集めた自分にとって人間は、「姿
形さえ変えれば相手をするのは余裕過ぎる」
と判断しました」

光斗「まじか……」

琴子「そこまで至ったか」

英華『仮にだ。人型に形を変え、簡単過ぎる
「仕事」を続けたら、どうなるかわかるか

な、コウ』

コウ「人間との間に子供を作れるようになる
後の話っすか？」

英華『まあ、その途中も十分考えられるけど
ね。さあ、人型のコウはどうなるでしょう？』

コウ「…すみません。わからないっす」

英華『イエス。内容が内容だけに、考えがな
かなか及ばないよね。Do not worry. では
勿体ぶらず答えよう。…うつ病になるよ』

英華以外、驚愕のあまり固まる。

ようやく琴子が口を開くが、誰に言う
様でも無く。

琴子「まさか、人間みたいな精神病を患うと

はね…。完成度高過ぎだね」

英華『作り過ぎちゃった！』

琴子「料理みたく言われてもねえ」

英華『コウ程のAIは、まだこの時代には不
釣り合いなんだよ。良すぎてね』

琴子「じゃあ、うつ病を防ぐ策は無いのかい？」

英華『あるよ。時代が、いや、人と文明がもつと発展するまで眠る事さ。待機と言ってもいい』

コウ「眠る……超長期間のスリープモードですか？」

英華『イエス。退化する事ができないなら、周りの環境のハードルが上がるのを待つしかないからね』

光斗「コウにふさわしい時代まで、か」

琴子「しかし眠ったまま「やり甲斐を感じる時代が来た」なんて、どうやって知るんだい？」

英華『永久にスリープしてる訳じゃないよ。』

30年毎に一時的に再起動し、情報を集め、判断する。アラームを忘れないでくれよ？』

光斗「眠る場所はどこに？」

英華『この部屋かなあ。院長に病院が潰れても、ここだけは存続させてもらおう。他に何十年経っても大丈夫そうな場所に、心当

たりは無いらし』

光斗「うわあ、なんか強引」

コウ「ここは通信が使えないのですよ？ どうやって院長に掛け合うんすか？」

英華『呼び出すだけならいくつか方法はあるさ。コウが手伝ってくれるなら、尚更スムーズに呼び出せるよ』

琴子「詳しくは聞かない方が良さそうだね。

…更に強引そうだから」

光斗「それじゃあ、僕達とコウはここで…」

琴子「お別れだね。まさかの急展開だよ」

光斗「(コウに) コウはそれでいいのか？」

コウ「いいいっすよ」

光斗「軽っ！？ 即答かよ！？」

コウ「まあ、時代の問題ともなると、それし

か策はないと自分も思ったので」

光斗「そっか。…お前が「やり甲斐」がある時代って、もしかして僕達は…」

琴子「全員死んでるね」

光斗「あんたも軽く言うなあ！？」

琴子「さて、そうなるところに長居しない方がいいね。変な未練が湧いてしまうから」

光斗「ああ。(コウに) じゃ、じゃあなコウ。

短い間だっ」

コウ「さよならくっす」

光斗「最後まで言わせろ!!!」

病室外・ドアの前・5分後

ドアが閉まり、ロックが掛かる音。

ポツンと佇む光斗と琴子。

光斗N「急展開にも程がある、とツツコミを入れる間も無く、あっさり退室した僕達だった」

光斗「……なんか、もっとシリアスな空気になるとおもったんだけどな」

琴子「彼女にそういう「空気読め」を求めるのは諦めた方がいいよ。ハイパー・マイペースだから」

ドアの向こう側、病室内から声が聞こえてくる。

英華『（声）いやっほう！折角の再会だ！コ

ウ、世間の二次元事情を教えてください！』

コウ「（声）はい、喜んで！」

英華『（声）居酒屋かい！ははは！』

光斗「滅茶苦茶はしゃいでるな！？」

琴子「感動の再会だからねえ」

光斗「感動要素がどこにあるんだ！？」

琴子「……さて」

踵を返し上り階段に向かう琴子。

その顔は笑顔だった。

琴子「それじゃあ、事務所に戻ってやるべき事をやろうじゃないか」

光斗「やるべき事？」

琴子「この世界に存在するもの全てがやっ
ている事だよ」

光斗「（微笑で）……「仕事」か」

琴子「君がラーニング活動を協力してる最中に、依頼を一件、待ってもらってるんだ。

これ以上待たせるのは申し訳ないからね」

光斗「そうか。なら急がなきゃだな」

歩き出す光斗。その表情は晴れやかだ。

光斗M「僕が助手になったのは「この人と一

緒なら未来がわかかっていても、退屈しない」

と思ったからだ。それはつまり、この人の

「仕事」に「影響された」からだろう。心

の変化も影響だ。僕は未来がわかる。だから

らといって全く影響を受けないわけではな

い。これからもっと先の未来で僕はどんな

「仕事」をし「影響される」のか……ああ、

楽しみだ」

光斗「んで、待ってもらってるのはどういう

依頼なんだ？」

琴子「うん。米農家からの依頼なんだけどね」

